熊本学園大学水俣学講義　2020年10月1日

琵琶湖環境問題と水俣病問題はどうつながるか？

前滋賀県知事　元環境社会学会会長　参議院議員
嘉田由紀子（資料提供：滋賀県）

浜の橋板は嘉田にとって床の間かつ洗面所

今日、お伝えしたいこと

（1） 自らの生い立ちと環境学への思い

（2）琵琶湖環境問題は富栄養化問題
“ふとっちょ琵琶湖”はのんきな環境問題？

（3） 水俣との出会い^命の原点を学ぶ

（1）

自らの生い立ちと
環境学への思い

研究背景と滋賀県・琵琶湖への思い

1960年代

ー埼玉県養蚕農家生（農家の母の苦労・母の三つの教え；自然の不思議・弱者への共感・食いぶちは自分で）

ー15歳の関西修学旅行、18歳の高校修学旅行で出会った近江と琵琶湖の強烈な記憶

1970年代

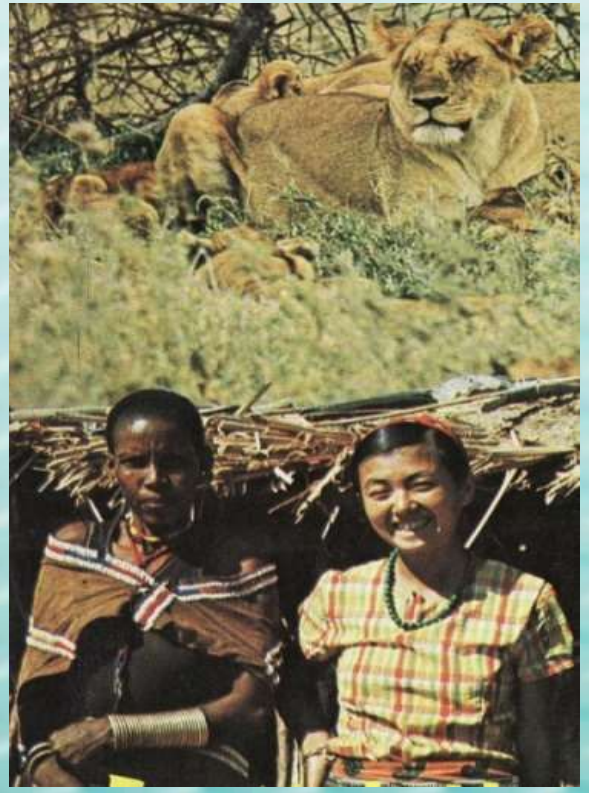
ー高校時代に出会った三冊の本
（今西錦司、梅棹忠夫、中尾佐助）

ー関西の大学を選ぶ
（アフリカ探検：女人禁制の探検部に押し入る）

ー未開といわれるが人間力全開のタンザニアでフィールドワーク（水と人間のかかわり）

「コップ一杯の水・一皿の食べ物の価値」
（1972『成長の限界』：メドウス他）

環境共生社会への関心



1971年、タンザニアの村にて
コップ一杯の水、一皿の食事の価値に目覚める

1973　アメリカ留学（日本の環境共生型水田社会研究を促される）

1974　滋賀県、琵琶湖辺の水田農村を研究対象に

1980年代

滋賀県職員「琵琶湖研究所員」として琵琶湖と人のかかわり研究開始（梅棹・吉良構想）

滋賀県内集落のフィールドワーク研究

生活環境主義の誕生（水と人の環境史）（鳥越・古川・松田）

生活者意識を埋め込んだ環境問題への政策理論づくり

1990年代

住民参加型の琵琶湖博物館提案・準備・開館・運営

世界各地の湖沼地域の比較環境社会学研究

古代湖・琵琶湖の世界的価値を整理・発信

2000年代

京都精華大学で環境社会学教員　（2000年～2006年）

滋賀県知事（2006～2014年）

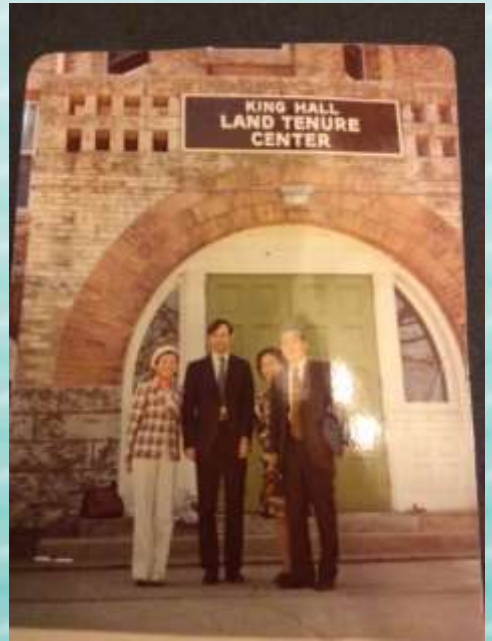
研究者の経験と理論を琵琶湖政策・滋賀県の未来づくりに活かしたい“みっつのもったいない”（財政リスク・環境破壊リスク・人口減少リスクへの歯止め）政策を地域から訴え・実践したい。

2019年

知事時代に実現した政策を国政に！特に「ダムに頼らない流域治水政策」と、「子育て三方よし」による少子化対策の成果を全国へ！

アメリカ留学中に日本の水田農村の研究（自然と人間の共生社会モデル）促される

- ハーディンの所有論（共有地の悲劇）→共有地でないことの悲劇
- アルネ・ネスのディープエコロジー論（人間中心主義からの脱却）
- リン・ホワイトのキリスト教的自然観と環境破壊 VS パスモア
- レイチェル・カーソンの「Sense of Wonder][Silent Spring]
- アメリカでの指導教授からアドバイス　→日本の水田農村の持続性こそ研究価値がある
- 子育てとの両立に悩む嘉田に社会心理学教授からのアドバイス
  ～1日24時間のうち23時間は仕事・研究を、子育ての愛情は1時間で高密度



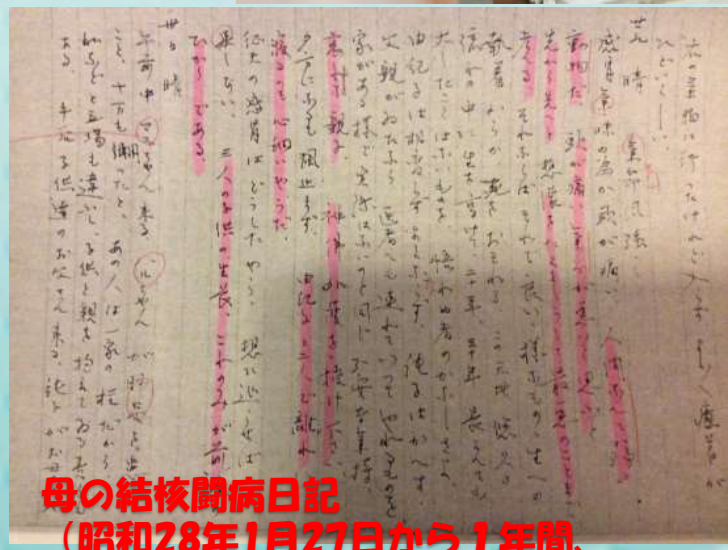
嘉田はなぜ環境研究を目指したか
（母からの教えを継ぐ）

1. 農家の長男の嫁として苦労してきた母からの教え
「自分の食いぶちは自分で稼ぎなさい」
昭和20－30年代の農村女性の苦難（大家族・子育て、過酷な農業労働、結核、家制度の元での嫁姑関係、女の腹は借り物、嫁の人権は全く認められず
薬代が欲しい！→現金収入を自分で稼ぐ事！）

2. 「女に教育はいらない」という祖父の強制の中で隠れて勉強していた私を、養蚕と野菜づくりで学校へ送ってくれた母。自分の人生は自分で切り拓きたい

3. 家族社会学を学ぶ中で、世界の女性の暮らしの現実を知り、社会をよくしたい、という社会的正義感から社会学者としての研究を継続

4. 農業をやりながらの農本主義者でかつ博物学的な知識を教えてくれた母。「名前のない草はない」という教え、押し花。農業をやりながらの周囲の自然界への関心が私に環境学者としての関心を育ててくれた



母の結核闘病日記
（昭和28年1月27日から1年間、2014年3月発見）

（２）

琵琶湖環境問題は富栄養化問題
“ふとっちょ琵琶湖”はのんきな
環境問題？

1970 年代の琵琶湖総合開発をめぐる水環境思想状況

（１）琵琶湖の水質汚染には、下水道に代表される近代技術で対応可能→「近代技術主義」

「下水道　琵琶湖浄化の　第一歩」

（２）琵琶湖の環境破壊を止めるには、ヨシ帯など、自然環境の保全が大切→「自然環境保全主義」

「琵琶湖研究所は御用研究所」

（３）琵琶湖研究所での社会・文化系の研究

地元生活者の水・湖とのかかわりの変遷から環　境保全の目的を導きだそう→「生活環境主義」

嘉田・仲間との琵琶湖研究史

1980年代 「虫の目」調査：
主体は地域居住者：住民

- 「琵琶湖辺の暮らしでの、水と人間のかかわりの内なる意味を発見した時代」
- 「うおじま、水田、水界の文化的価値」
  『水と人の環境史』（1984年）
- 近代技術主義 vs 自然環境保全主義に対して第3の立場ー生活環境主義、
- マキノ町知内村の250年の「村日記」の研究が原点。居住者、生活者の立場を強調、地域コミュニティの意味
- 湖辺の他の地域では、文字記録にプラスして生活写真記録を発掘。10万枚の生活写真の発見、データベース化、今昔比較
- 古写真を活用した「資料提示型インタビュー」。

「生活環境主義の立場」

「方法としての環境史」（鳥越皓之・1984年）
（鳥越・嘉田編『水と人の環境史』1984年）

（1）伝統＝過去の知の累積を分析、伝統とは反逆的で個別的である。

（2）環境史は客観的な第三者の立場ではなく「当該社会に実際に生活する居住者の立場」にたつ。

（3）「近代技術主義」「自然環境保全主義」に対する第3の立場として「生活環境主義」を標榜する。

（4）「生活環境主義」は「科学的な知」（要素分析的）と「日常的な知」（独自の全体的・共同的主観）の橋渡しをする立場。

（5）なぜ？環境保全分野において科学に対する不当な期待が不当な落胆を伴う（単なる合意形成のために科学や科学者が利用される）場面にたくさん出会った。

（6）「環境史」は「実証」としての経験的事実と一般化された「理論」とを橋渡しをする立場でもある。

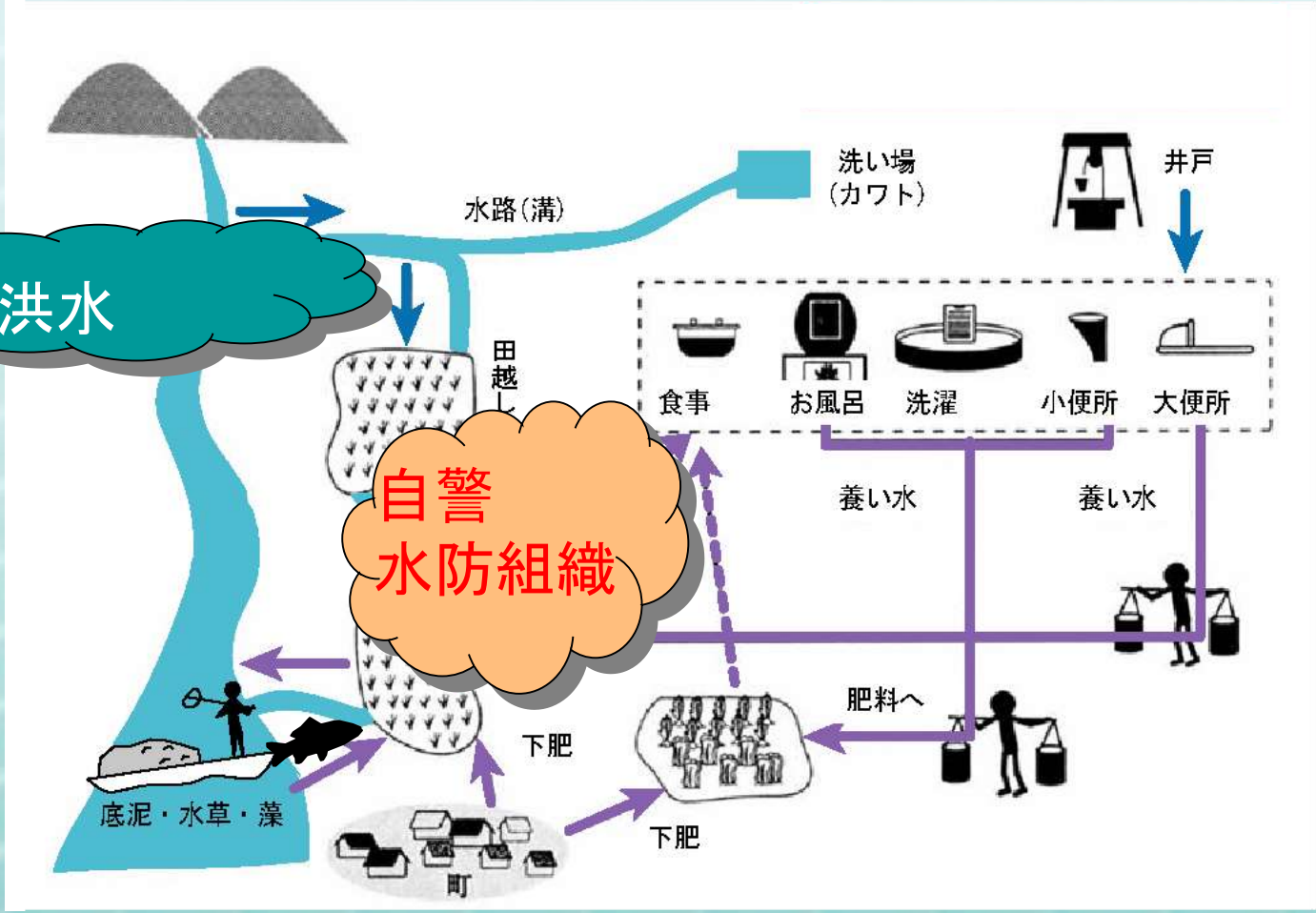
（7）最終的に実証・理論の判断基準は「日常的生活感覚」に基づく「リアリティ」である。

“近い水”が生きていた時代

循環と使いまわし、自己管理の時代

■ 水システム模式図　江戸～明治中期（昭和30年代まで）

河川からあふれることを前提に流域共同体で水害対応



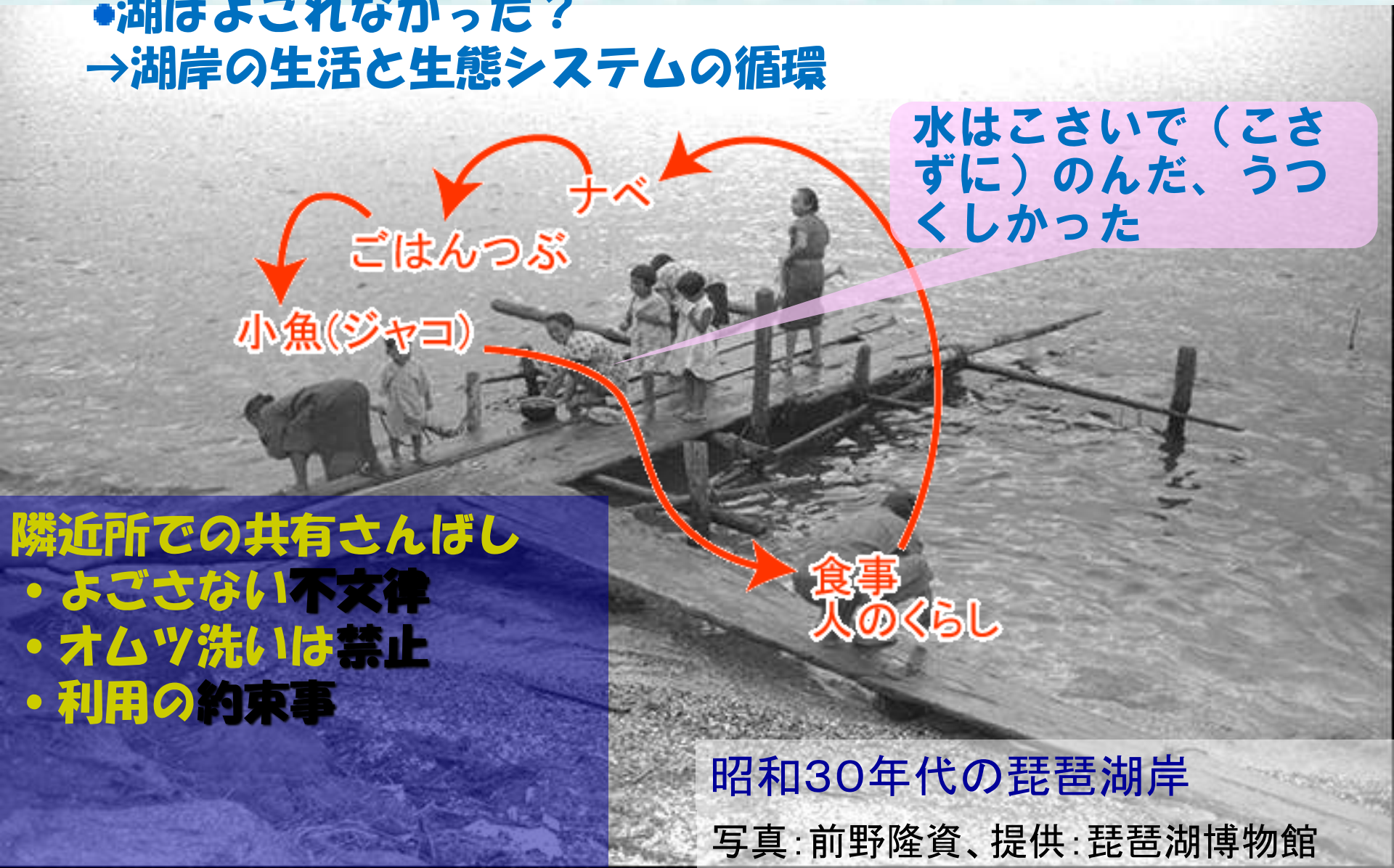
水の使い回し・循環

出典：嘉田由紀子：『環境社会学』、岩波書店、2002、P15

「近い水」の暮らし（高度経済成長期以前）

- 湖はよごれなかった？

→湖岸の生活と生態システムの循環



水はこさいで（こさずに）のんだ、うつくしかった

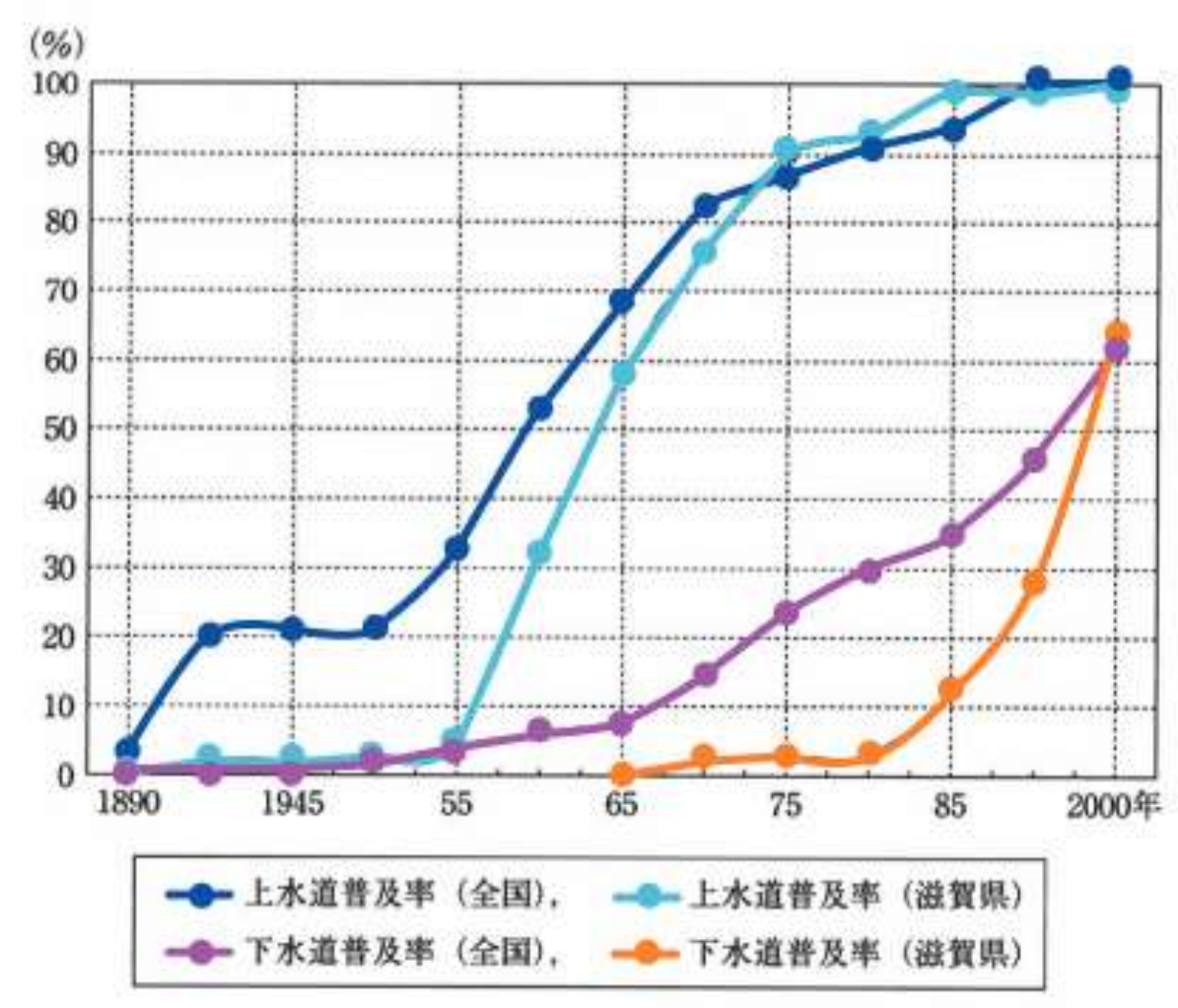
隣近所での共有さんばし

- よごさない不文律
- オムツ洗いは禁止
- 利用の約束事

昭和30年代の琵琶湖岸

写真：前野隆資、提供：琵琶湖博物館

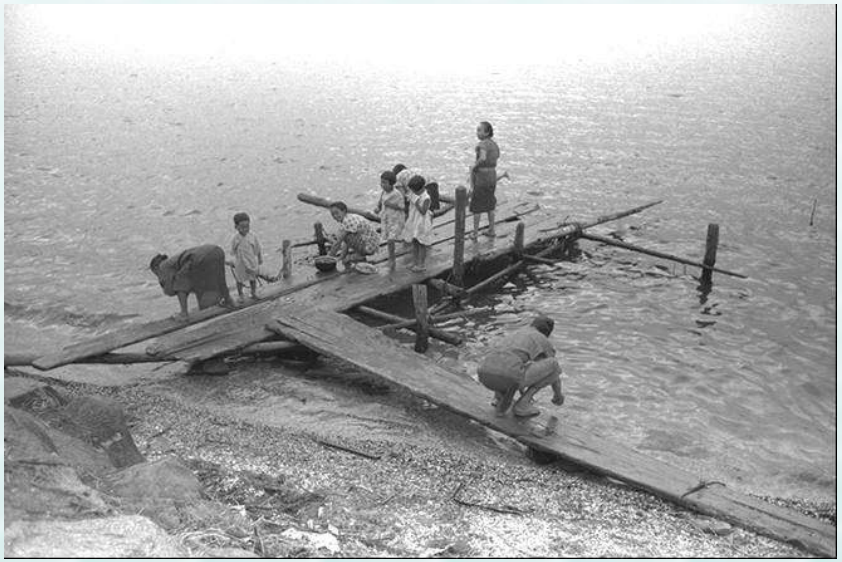
上下水道化という社会変化



琵琶湖辺の上下水道の変化

「遠い水」の暮らしへの移行（高度経済成長期）

- 湖岸の洗い場は消えて、水道に･･･



1956（昭和31）年

1997（平成9）年

前野隆資撮影・琵琶湖博物館提供

古谷桂信資撮影・琵琶湖博物館提供

水害は多いが人が死なない治水
ー高島市マキノ町知内村モノグラフー

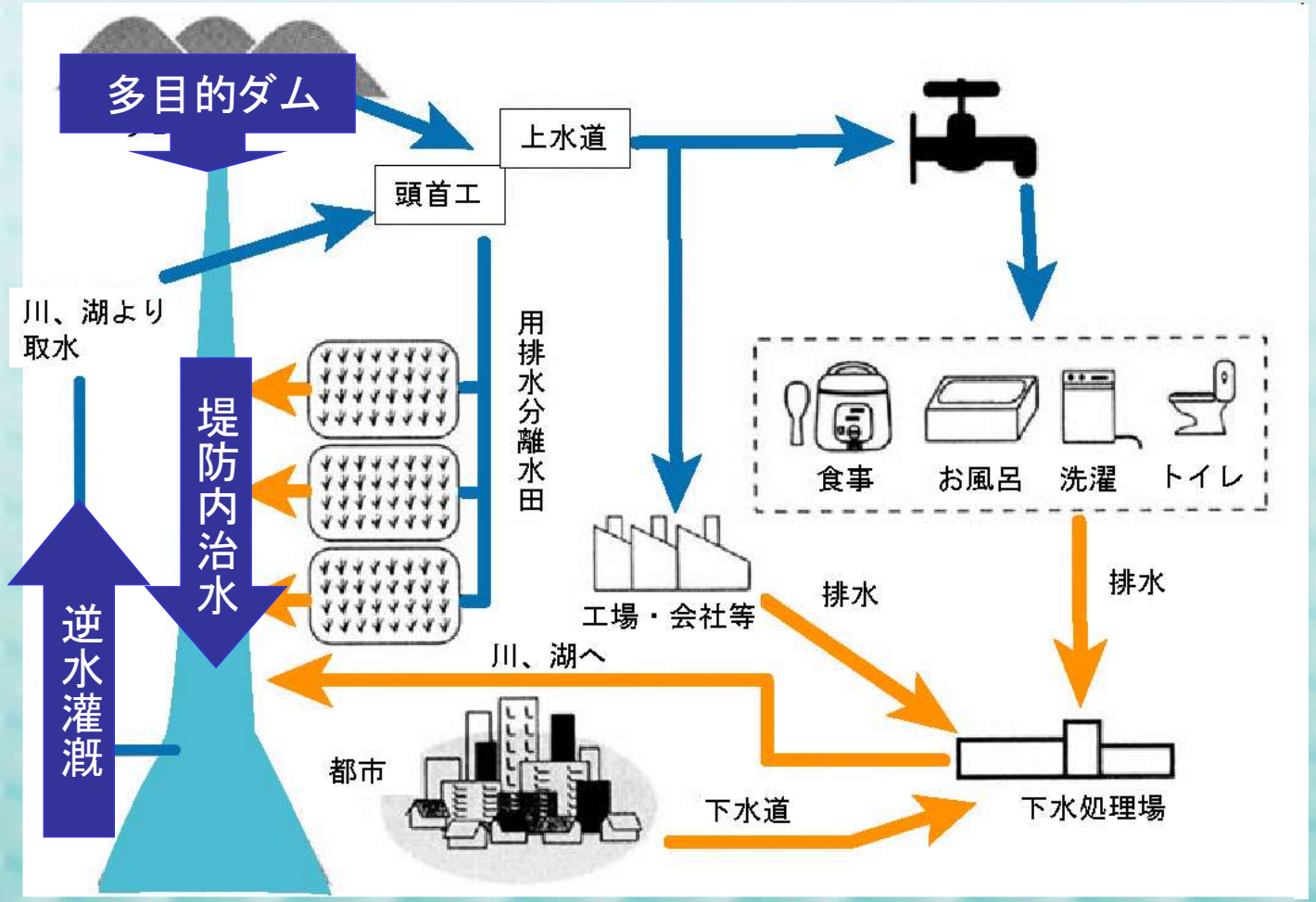
大正2年、村自前の堤防工事完成記念写真

知内川の「切所」に今もたたずむ「水竹地蔵」

“遠い水”による水系閉じ込め型水システムの完成

■ 水システム模式図　平成年代　水の使い捨て

河川に水を閉じ込めざるをえない縦割り行政のつらさ



水の使い捨て

出典：嘉田由紀子：『環境社会学』、岩波書店、2002、P15

徹底した聞き取り調査・生活者目線からみえてきた望ましい環境像とは？

（１）多種多様な生き物

「この川にはホタルが顔にあたるくらいたくさんいた」

「ボテジャコもいっぱい」「田んぼも魚で溢れていた」

（２）生活の中で生きていた湖と川

「この川からは風呂水をくんで洗濯をした」

「この川の水は昔は飲めたのに・・・」

（３）子どもたちの遊び場としての水辺

「毎日、川に魚つかみにいった」

「えかい（大きな）ナマズをつかんだことはわすれられん」

（４）小コミュニティによる自主的な水害対応と川への愛着

「大雨のとき、堤防の見回りを自分たちでした」

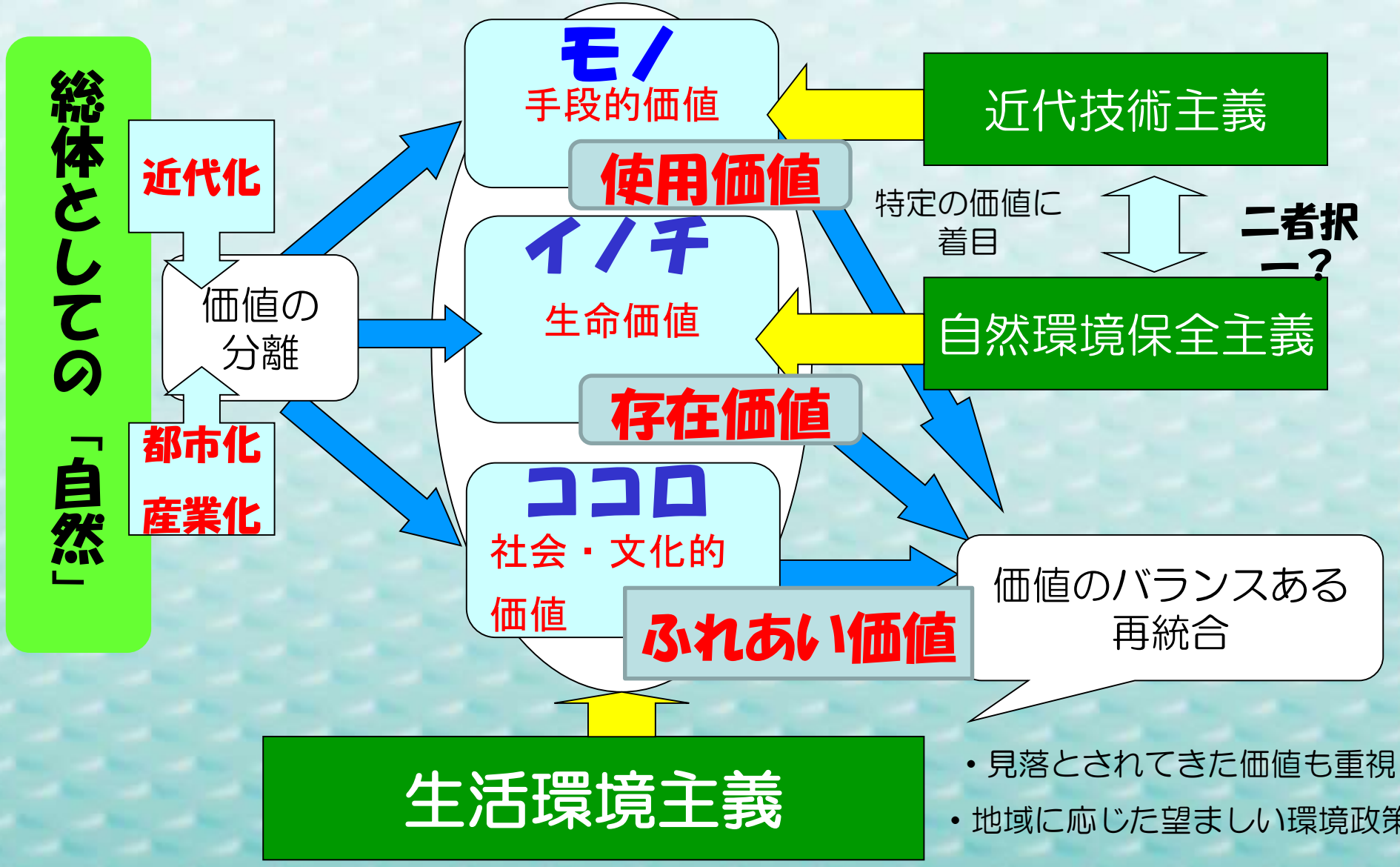
「堤防直しも自分たちでした。川は私たちのもの」

⇒　「水の汚染」とは、個別水質や物質の状態だけではない。

人びとが水との関係性の総体のものがたりを失ったことをも意味するのではないか？

価値論的に見た環境の多面的意味

内なる近い自然を取り戻すために価値観の転換を



科学知、生活知の補完を原点に博物館の理論的道筋をつくる

＜科学知＞

・計り、数える知識

- 専門家が、それぞれの領域の知識蓄積のために集める。
- 自然のメカニズム、社会組織の仕組みなど。
- 因果関係、数値化、平均値、グラス、図
- 同業集団のレビューにより評価がきまる。

＜生活知＞

- 五感（感性）から知識へ
- 住民、生活者がそれぞれの興味に応じ集める。
- 生活文化、自然と人のかかわりなど。
- 物語、絵、歌など多彩な表現が可能
- 生活者感覚（心性）から、もっともらしい、納得がいくかどうかが評価軸。

科学主義に感性をいかに埋め込むか？

（１）たとえば、ダム建設は水量主義に基づく、河川の中だけで対応、河川工学という科学的で計算可能でち密な議論、委員会でもこればかり。感性としては、河川にダムをつくるだけで水害被害はふせげるのか。「遠い水」の徹底、政策化、予算化。

（２）魚がいない川はさびしい。「遊びと食」の重要性。昔から遊びと食文化もはぐくんできた。人間や生き物を川からひきはがす政策「よい子は川で遊ばない」、おかしいと思っていた。

遊びや食・風景をいれこんだ 「近い水」を取り戻したい

（３）それは子ども時代からの母親の影響。川や森、畑など、養蚕農業や水田・畑仕事をしながら生き物に近づいてきた経験。「名前のない草はない」という自然へのまなざし。押し花をつくって、名前の意味など教えてくれた。学習・教育の重要性。

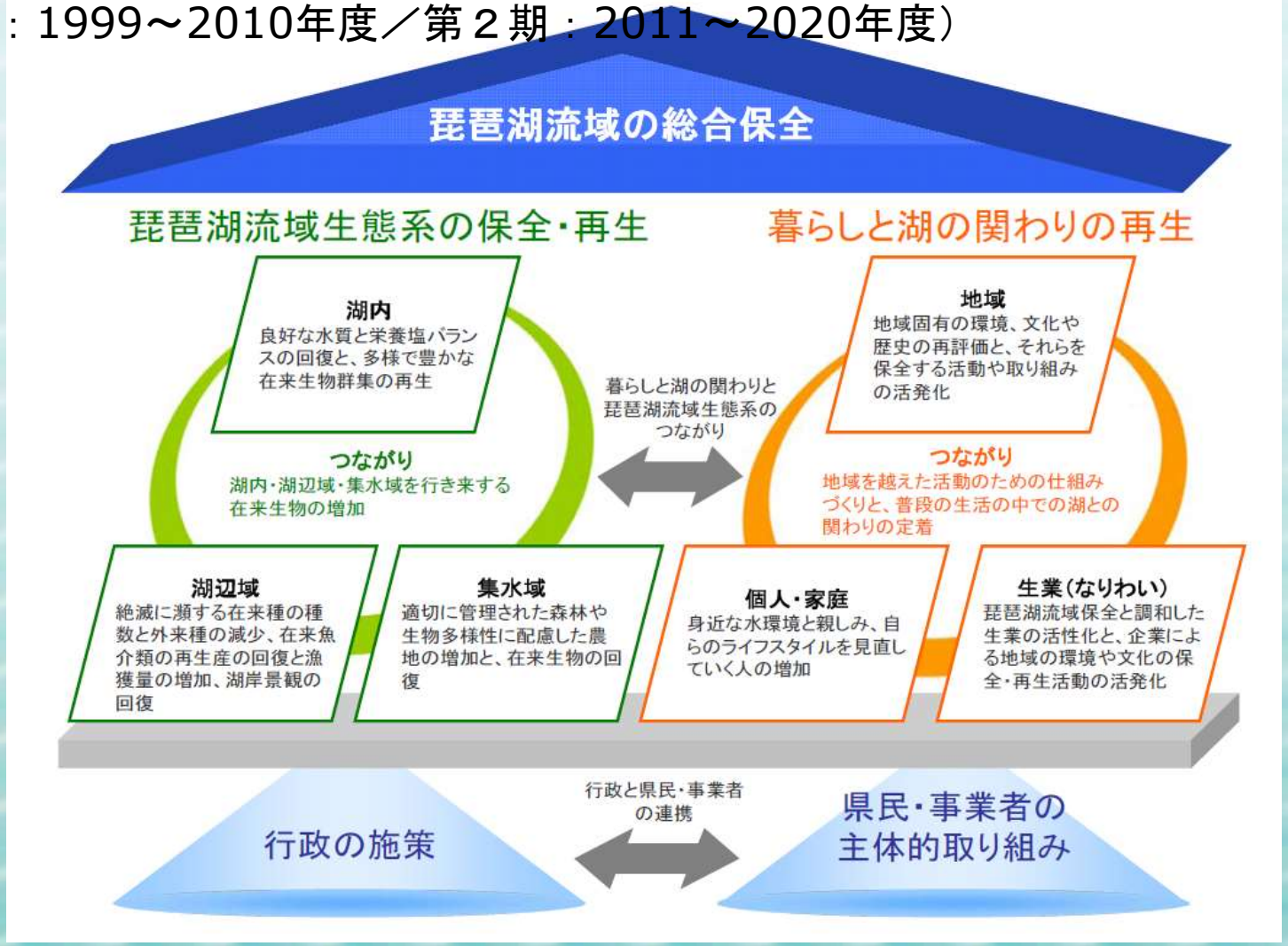
日本の自然と文化の関係性は
重なり型モデル
生物と文化の多様性は重なる

→「守りをする」
という感覚

知事として目指した「近い水」を取り戻す環境政策マザーレイク21計画

（琵琶湖総合保全整備計画）

（第１期：1999～2010年度／第２期：2011～2020年度）



琵琶湖の水辺の今昔：
水路が消えて道路とパルプ灌漑に
（琵琶湖総合開発の成果と課題）

昭和30年頃

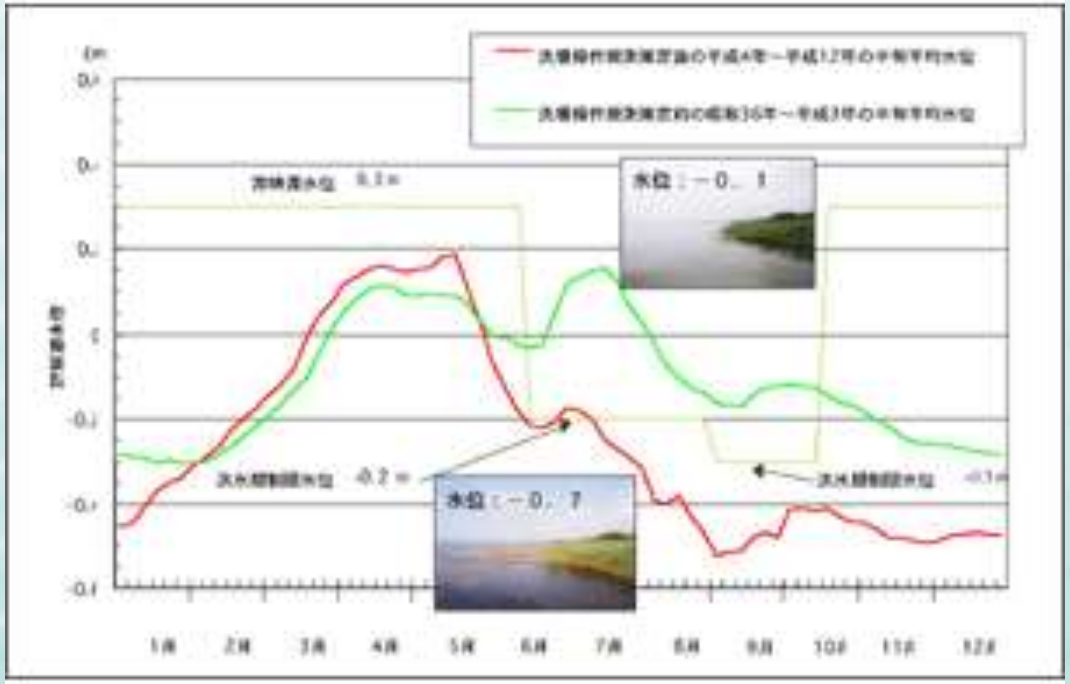
写真提供：琵琶湖博物館

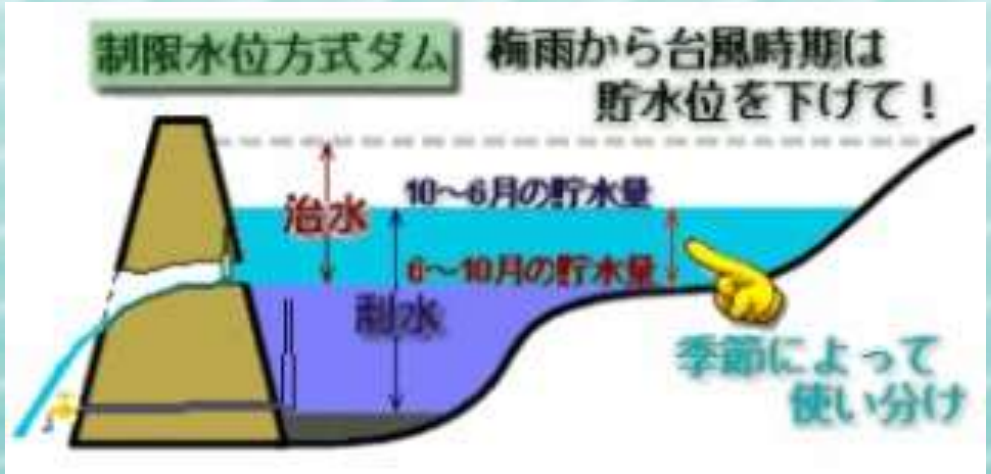
写真撮影：藤村和夫

平成9年

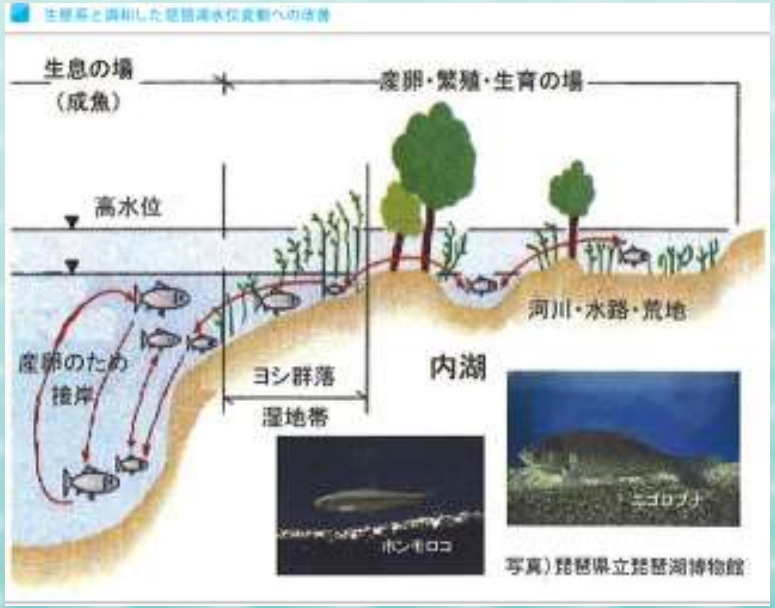
琵琶湖総合開発での治水・利水を目的とした人為的な水位操作

■ 瀬田川洗堰 操作規則策定前後での琵琶湖水位の比較





在来魚介類の悲鳴が聞こえますか？



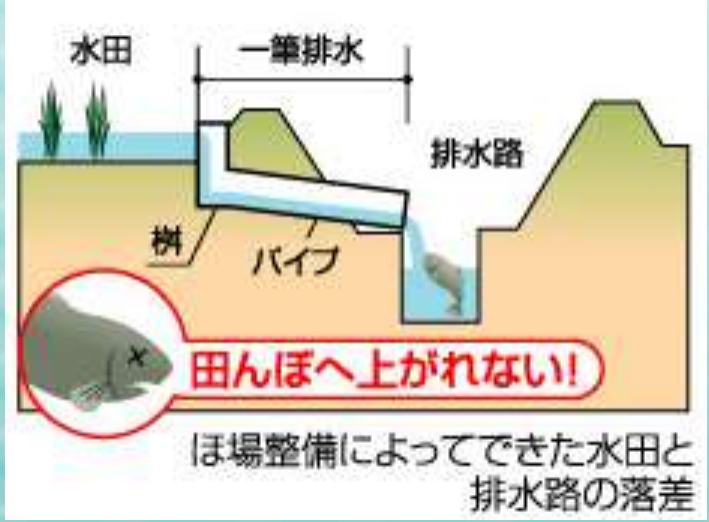
「遠い水」を「近い水」へ　水田に魚道を！
魚のゆりかご水田プロジェクト

- 排水路に魚道を設置し、琵琶湖から田んぼへ魚が移動して産卵し、稚魚が育つ水田環境に再生
- 平成21（2009）年度に全国知事会「先進政策大賞」受賞

昭和40年頃まで

昭和40年代～現在

魚のゆりかご水田プロジェクト



ほ場整備によってできた水田と排水路の落差

魚道設置による水田と排水路の落差解消

取組状況

湖魚が産卵のため魚道を遡上
（ナマズの遡上）

湖魚が田んぼで産卵
（ニゴロフナの産卵）

田んぼで稚魚がふ化
（ニゴロブナ稚魚の遊泳）

生きもの観察会を通じ、琵琶湖と田んぼの関係を多くの方に説明

『魚のゆりかご水田』は、五方によし

生きものによし

田んぼは、エサのプランクトンが豊富で、オオクチバス等の外敵がいないため稚魚の生存率は30%と高く、まさに魚にとって『ゆりかご』となります。

琵琶湖によし

魚道で排水路を堰止めることにより、田んぼの濁水を押さえることができます。

地域によし

多くの人が田んぼを訪れるようになり、交流が生まれ、田んぼに人と生き物のにぎわいが戻ります。

農家によし

『魚のゆりかご水田米』として、魚にやさしい田んぼでつくられた、人にも優しい安全で安心な米のブランド化を目指しています。

子どもによし

農業が機械化され、子どもたちが水田や畑に近づく機会が減りました。田んぼに魚がいることで、子どもたちも水田、米づくりに興味を持つようになります。

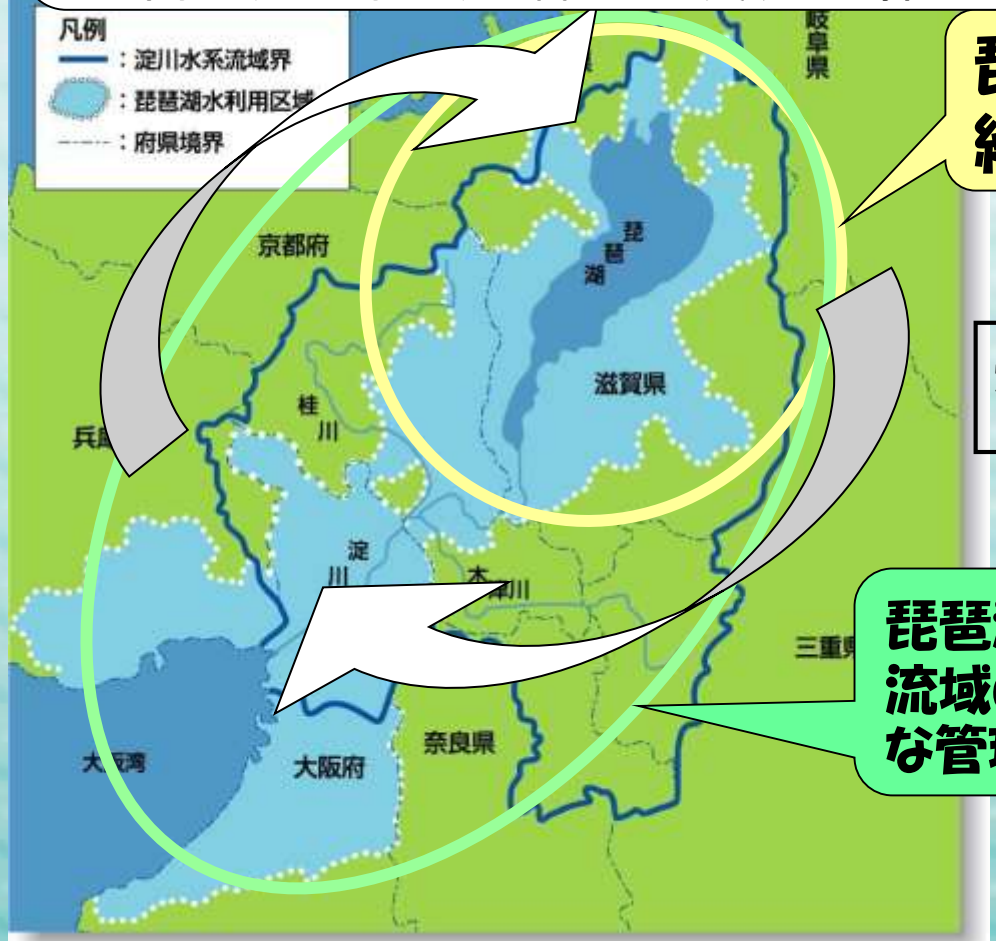
取組み状況
H18年度　約40ha
H19年度　約80ha
H25年度　約110ha

湖国名産『ふなずし』

持続可能な琵琶湖淀川流域社会に向け、流域の恵みを健全な形で引き継ぐことが必要

琵琶湖淀川流域は一体

- 水資源供給、水質・生態系のつながりなど。
- 共通の課題（外来種、森林整備遅れ・・・）
- 関連する・相反する課題（水質、水位操作・・・）



琵琶湖の総合保全

不可分

琵琶湖淀川流域の適切な管理

参画・連携が必要

滋賀県
琵琶湖水政対策本

マザーレイク21計画の策定
（琵琶湖総合保全推進部会）

調和

琵琶湖淀川の流域管理の検討
（琵琶湖淀川流域自治推進部会）

議論・検討
働きかけ

流域関係者

（3）
水俣との出会いと学び

のんきな琵琶湖の環境問題
なかなか水俣に足をはこべず

琵琶環境政策の原点は水俣だった
！
1999年に初めて水俣を訪問

武村正義の琵琶湖環境問題の原点は水俣にあった！窒素社員細谷卓爾の存在

チッソ水俣社員の細谷卓爾さんが武村知事に環境問題の深刻さを指南

細田卓爾さんは今も、嘉田が代表の地域政策集団「チームしが」の特別顧問として存在感を発揮してくれています

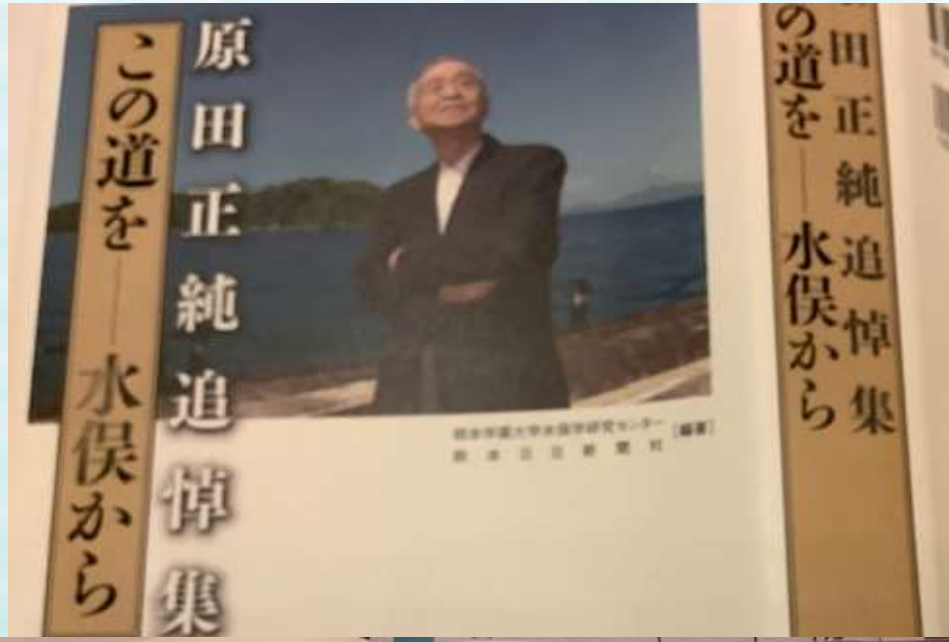
1956年に東大卒業後窒素に入社
初任地が滋賀県守山市

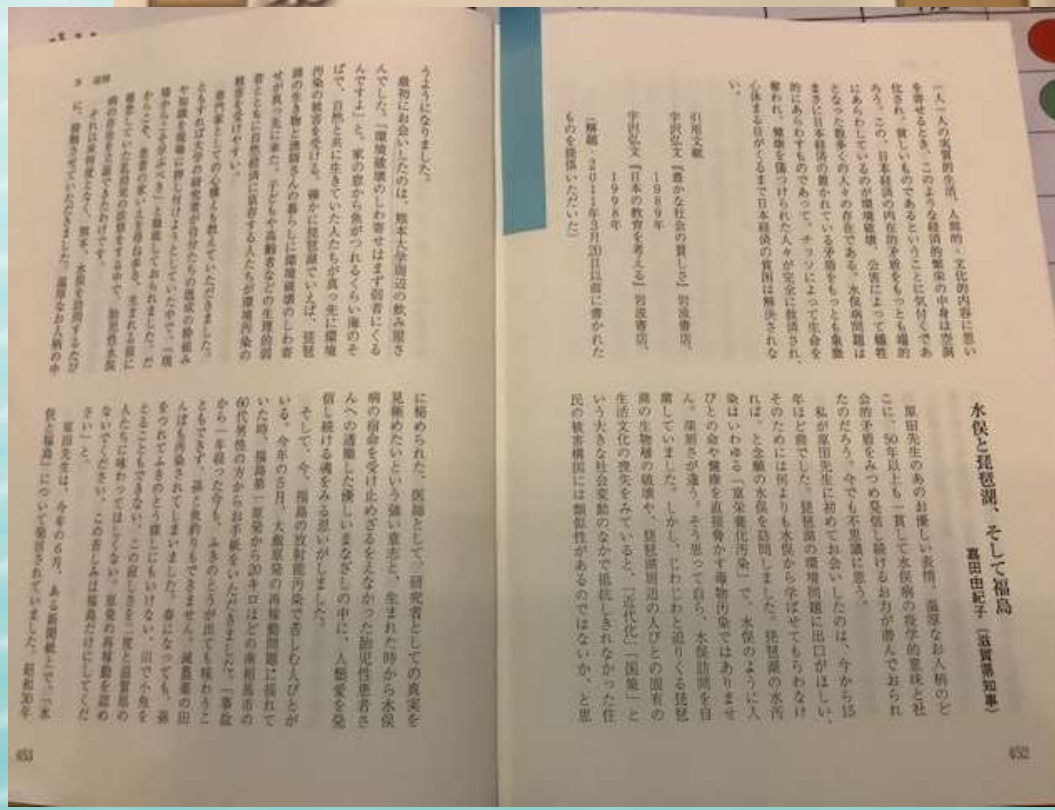
1960年代の窒素の労動問題に直面、同時に水俣病が発見・問題化、社員を大事にしない企業は社会も大事にせず公害問題を起こす！

1974年、労働運動から滋賀県知事選挙（1974年）で社共共闘で自民党現職をやぶって武村県政誕生、直後に水俣につれてくる

原田正純さんとの出会い

1999年12月熊本大学付近の飲み屋さん
「かださん、環境問題はいつも最も弱い人にしわ寄せがくるんですよ」
水俣病から福島原発事故被災者問題へ
公害・環境問題はますます激甚化している





うようになりました。

最初にお会いしたのは、熊本大学周辺の飲み屋さんでした。「環境破壊のしわ寄せはまず弱者にくるんですよ」と、家の窓から魚がつれるくらい豊かだった、自然と共に生きていた人たちが真っ先に環境汚染の被害を受ける。弱かに怒りを感じていらっしゃる、怒りの生き物と漁師さんの暮らしに環境破壊のしわ寄せが真っ先にきた。子どもや高齢者などの生理的弱者とともに自然経済に依存する人たちが環境汚染の

[1] 形文献
宇沢弘文『豊かな社会の貧しさ』岩波書店、1989年
宇沢弘文『日本の教育を考える』岩波書店、1998年
（解題：2011年3月20日以前に書かれたものを掲載いただいた）

水俣と琵琶湖、そして福島

喜田由紀子（滋賀県知事）

原田先生のあのお優しい表情、温厚なお人柄のと、ご一緒に、50年以上も一貫して水俣病の疫学的意味と社会的予言をみつめ発信し続けるお力が潜んでおられたのだろう。今でも不思議に思う。

私が原田先生に初めてお会いしたのは、今から15年ほど前でした。琵琶湖の環境問題に出口がほしい、そのためには何よりも水俣から学ばせてもらわなければ、と全国の水俣を訪問しました。琵琶湖の水汚染はいわゆる「富栄養化汚染」で、水俣のように人びとの命や健康を直接脅かす毒物汚染ではありません。違いがあるのだろう、そう思って自ら、水俣訪問を目論していました。しかし、じわじわと迫りくる琵琶湖の生物種の絶滅や、琵琶湖周辺の人びとの固有の生活文化の喪失をみていると、「近代化」「国策」という大きな社会変動のなかで抵抗しきれなかった住民の被害構図には類似性があるのではないかと、と思

に始められた。医師として、研究者としての真実を見極めたいという強い意志と、生まれた時から水俣病の宿命を受け止めざるをえなかった胎児性患者さんへの連帯した優しいまなざしの中に、人間愛を発信し続ける魂をみる思いがしました。

そして、今、福島の放射能汚染で苦しむ人びとがいる。今年の5月、大熊原発の再稼動問題に揺れて60代男性の方からお手紙をいただきました。「事故から一年経った今も、みずのうが出ても味わうことはできず、福と食べりもできません。減農薬の野菜をつくってみるとう森にもいけない。山でも魚を とることもできない。この前にきたこの一度と放射能がないでください。」と。

原田先生は、今年の6月、あるご新聞紙上で、「水俣と福島」について発言されていました。昭和30年

石牟礼道子さん

「苦海浄土」の眼差し

まさに、人びとが最も心を許している日常的な生活の中で、ボラ釣りやタコ釣り、人びとの食べ物、聖なる魚とともに体内深く潜り込んでしまった。それなら日常という毒が入りこんだ同じ世界で語るしか、問題の根っこをとらえることはできない

杉本栄子さん
杉本肇さん

人さまは変えられないから
自分が変わるしかない

水俣病の中で4人の子ども
を産み育て、網本の暮ら
しをうけつぐ

1999年　嘉田自身があるこ
とで苦しんでいた時に「
のさり」という考え方を
教えていただく。わが母
のような包容力のある方
だった

杉本　肇氏

吉本哲郎さん
地元学

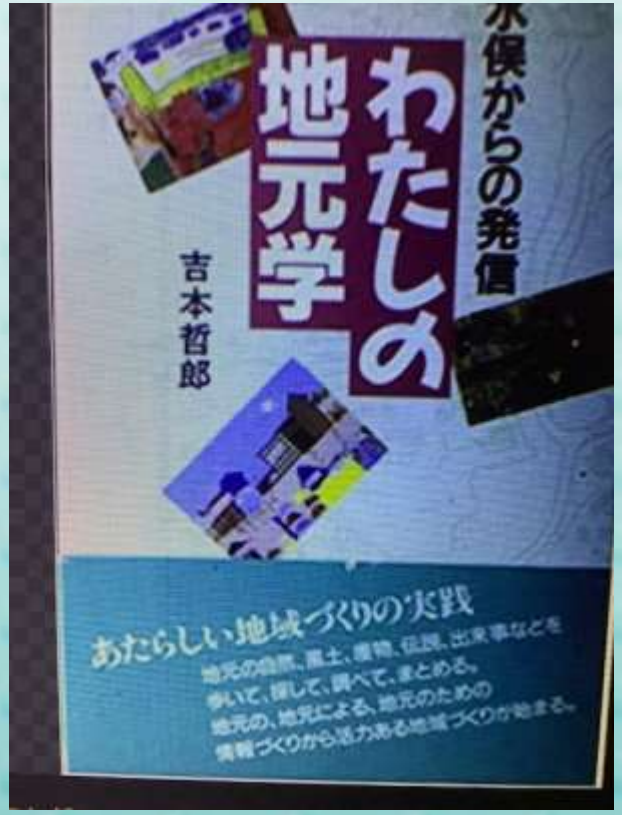
うちのおふくろは、水俣病の人は遠い、とおい人とおもってた。

水俣市役所職員としてもさわってはいけないテーマだった。

杉本栄子さんに出会い、海のもんと山のもんが仲よくしようというところからはじまった

もやい直しから地元学へ

全国の地域おこしのモデルとなり、次の世代が育ちつつある



高峰武さん
熊本日日新聞
水俣病が育てた地域ジャーナリズム

2020年7月球磨川水害死亡者６５名のリスト公開、犠牲者への敬意と共感、このリストを元に嘉田らは「何が生死を分けたのか？」調査

令和2年（2020年）7月18日 土曜日　熊本日日新聞　第28132号

死者の85% 高齢者

熊本豪雨２週間

避難の難しさ浮き彫り

熊本豪雨の犠牲者(65人)

県内の災害犠牲者の年代

2020年（令和2年）7月18日 土曜日

熊本日日新聞

熊本日日新聞社

くまもと TOMO

支えあおう 熊本 いま心ひとつに

コロナ禍を 命の水は 無駄にせず

熊本豪雨

26 支援の心 古里再生の力に

3 公費解体「半壊以上に」

6 人吉市の商工業被害215億

17 球磨川6カ所 過去最高水

28 災害「想定外」生死の境は

東京五輪、会場と日程決定

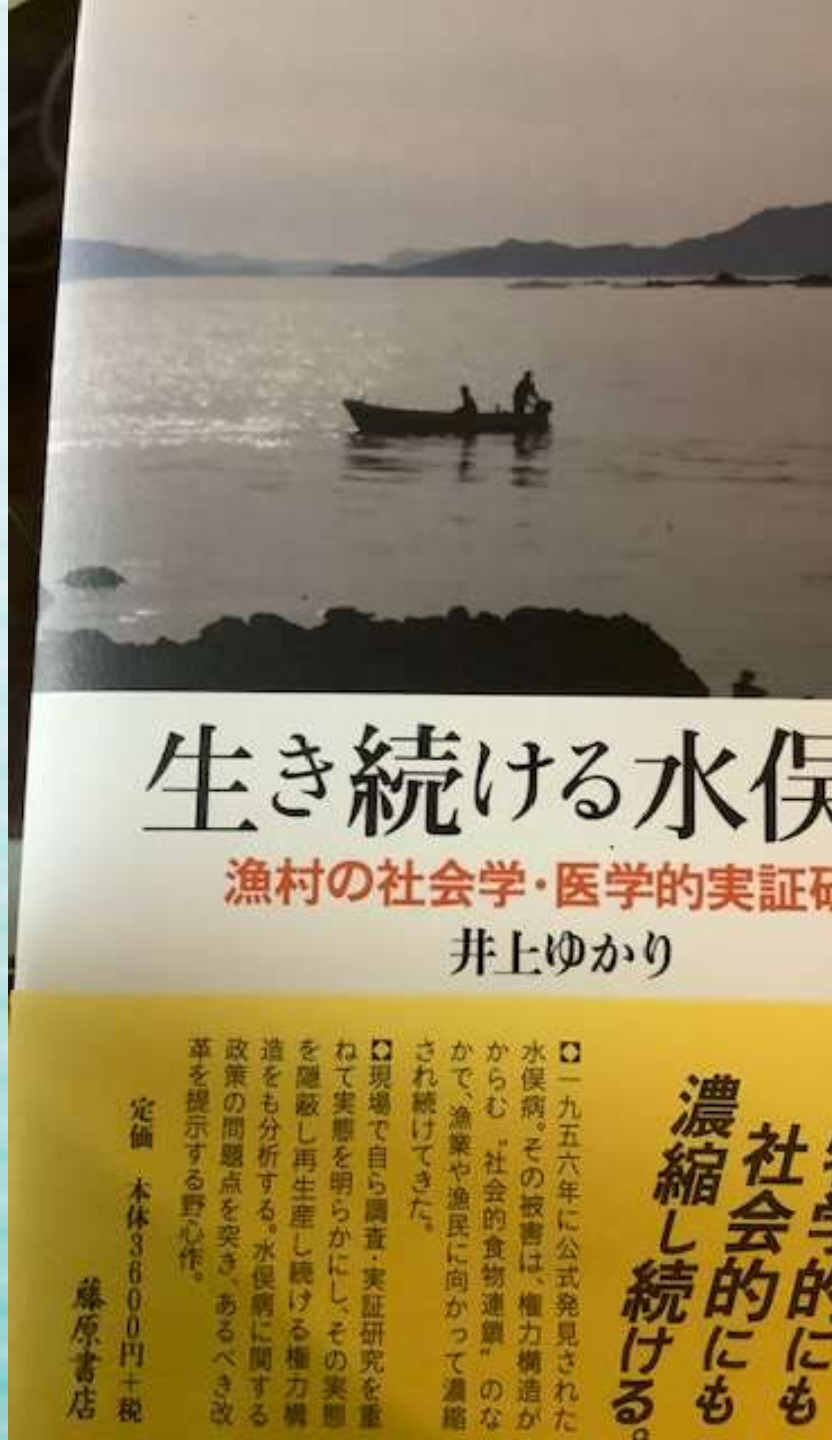
井上ゆかり著
『生き続ける水俣病』

水俣病をめぐる政治社会学研究の到達点。

特に漁村社会学と医学疫学的な地域研究を交差させて「社会的食物連鎖」の権力構造を微細かつ大胆に描きだした力作

原田イズムを現代と未来に引きつぐ金字塔ともいえる

緒方正人『常世の舟を漕ぎて』を漁村社会学の厚みあるデータにささえる研究でもある



最後に

令和2年7月球磨川水害にかかわって

ダムに頼らない治水政策
―流域治水政策―

民主党政権が達成できなかった
ダム凍結・中止を滋賀県では実現

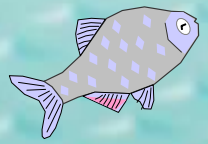
「かだマニフェスト2006」でのダム凍結提案

- 丹生、大戸川、永源寺第2ダムの県支出金合計200 億円以上が、県営の芹谷ダム、北川第一、第二ダム建設についても今後数百億円以上の県支出金が必要です。この**6つのダム建設計画について凍結**します。
- 以下の代替案を提案して県民の皆さんとの**対話を通して見直します**。
- 治水については、ダム以外の方法（堤防強化、河川改修、森林保全、地域水防強化）、すなわち**「流域（地域密着）型治水」**により対応します。
- 利水も、ダム以外の方法、**水の循環再利用システム**を構築します。
- また、公共事業の地域振興効果として、ダムのような大型公共事業は必ずしも**地域経済を長期的に潤す**ものではありません。流域（地域密着）型の河川改修や農業水源確保事業のほうが迅速な対応、地元の業者が直接工事に参加でき、しかも費用が安くて済むなど**脱ダムに関する代替案**を提言します。
- あわせて、ダム建設を前提に集落移転を余儀なくされた**地域の人々への謝罪と社会的配慮**を十分に行います

ダムだけに頼らず流域治水で

嘉田の環境社会学的地域調査で見えてきた住民自治の河川政策
３０年間の地域調査でわかったこと
～地域生活現場を徹底して歩き、古写真を提示し、耳を傾ける～

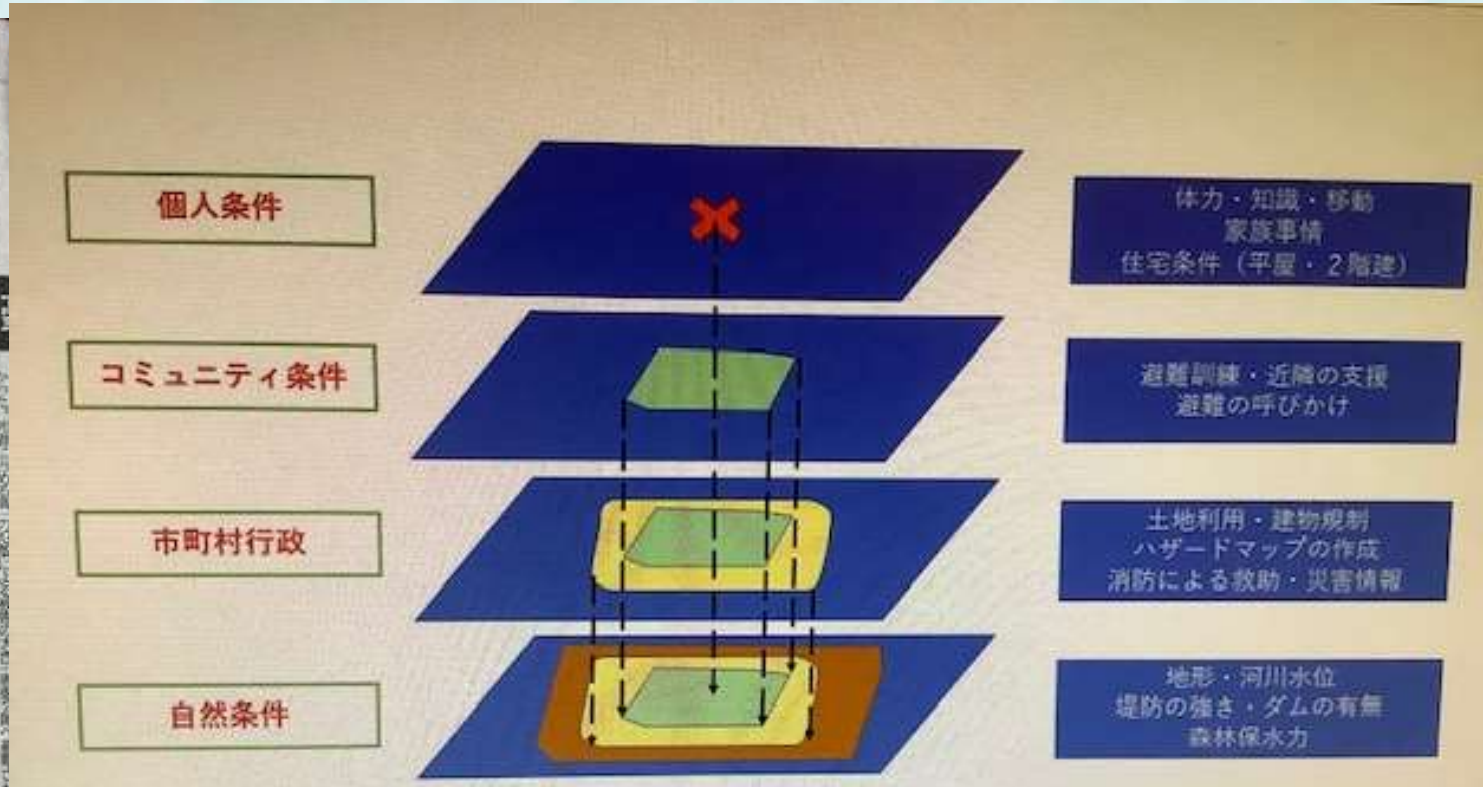
- 琵琶湖周辺の人びとの暮らしと水とのかかわりを湖辺の各地を歩きながら、昭和３０－４０年代のちょっと昔の話を徹底して聞き書き。
- 当事者としての意識、人びとがこだわりをもっていて、今からでも復活したいと思っているのは水質そのもの以上に水とのかかわりだった。
- つまり問題そのものが属地的、属人的に多様だった。
- そして人びとの願望はハード面の整備にプラスして川との関わりの豊かさを求めている。



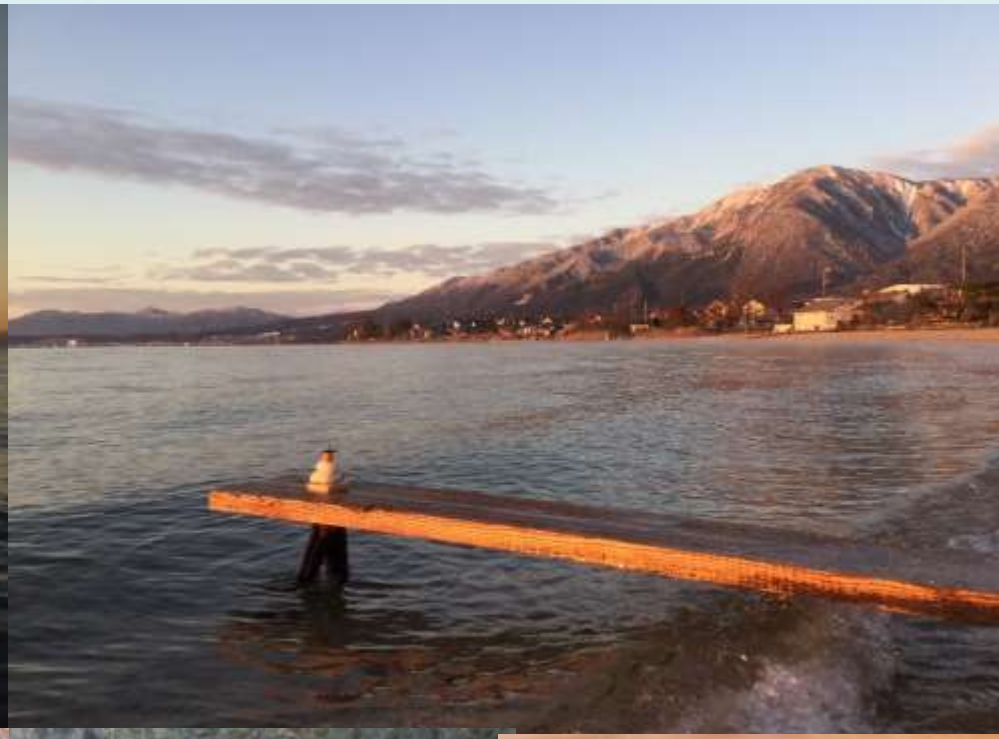
「何が生死をわけたのか？」

球磨川水害犠牲者５０人調査・続行中

ダムだけでは死者は減らせない



６１□水害犠牲者発生の構造的背景と流域治水との関係.

（京大防災研林治男氏の「五層モデル」を一部合体して四層モデルとした）.

元旦「天台薬師の池＝琵琶湖水神」からのご来光
水の恵みを水俣の皆さまへ！